

2021年6月18日

東京学芸大学 文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制整備事業」2021

企画開発委員会調査部会 第1回ヒアリング資料

滋賀県立大津清陵高等学校馬場分校

滋賀県立大津清陵高等学校馬場分校における外国人生徒等の教育

①生徒の実態

・日本語能力、学力

滞日履歴が一年半から日本生まれの生徒まで様々

JSLのステージ2の生徒から6の生徒まで混在している 上級生下級生関係なく能力も様々

新入生および転編入生徒にはDLAによる日本語能力を把握、学校全体で4月の会議にて共有

日本語自己評価シートを参考にレベルを教員側で把握し、聞く・話す・読む・書く力の目標設定

・生活・学習上の困難（心理面、家庭環境、地域との関わり等を含む）

外国籍生徒担当者および日本語指導担当者が生徒情報の交換会のために3月下旬に中学校訪問を行う

緊急の連絡先や、生徒個々の家庭の情報は、教員間で共有

・進路（キャリア認識、就業に対する意識）

◇就業に対する意識:学習費や生活費を自ら稼がなければならないため、学習より仕事を優先する生徒が多い。

また、派遣先の勤務の都合による一家転住や退学生徒もいる。

②日本語指導・教科学習支援

・教育課程上の位置付け、校内の受け入れ体制

学校設定科目「日本語」A,B,C,D：週2時間開講 年2単位 最大8単位（2単位×4年）取得可能

・指導・支援内容

1時間目 5：30～6：00（30分） 最初の15分から20分程度は帯活動として一斉指導。日本語であいさつ（ときどき生徒の母語を使用して、日本語の指導者に母語を教えることもする）。今日のニュース（NHKEASYWEBやさしい日本語のニュース）から、生徒の興味関心のあるトピックを選び、日本語指導者とマンツーマンに近い形で対話型の理解を深める活動を取り入れている。5W1Hなど、生徒のレベルに合わせた展開もっていく。要約することもさせる。ICTを活用できる環境にあり、プロジェクターを使用して、スクリーンに動画や写真、またBIGPADと呼ばれる提示した資料に書き込むことや、ハイライト・スポット、切り抜き、また付せんなど使用しながら全体で活動する場面もある。日本語能力検定試験のN5、4程度の聴解の問題および読解の問題が中心となるが、時には少し難しめのN2やN1のレベルの聴解の問題を全体で行い、達成感や自己肯定感を高める取り組みも行う。前期と後期の終わりにはそれぞれ、ミニプロジェクトをする。昨年までは絵本を翻訳して読み聞かせ、また日本語にて作文に挑戦。テーマは卒業してからの具体的な目標や、夢など。日本と他の国の文化の違いなど。全体または小グループ、さらには一対一でスピーチをすることも。さらに母語を日本語指導の先生に教えることも取り組み、生徒教員共に好評であった。自尊感情を高めることにつながる学習を実施した。

2時間目 6：30～7：20（50分） マンツーマンに近い形式にて個別学習。それぞれ個別目標を立てて漢字・語彙・読解など、N5からN2まで学習する。教材は、自主教材としてはひらがな、カタカナ、漢字のドリルのようなプリントから、生徒個々の能力に応じて、例えば日本語能力検定N5レベルの生徒向けには、実情に応じた教材を購入（昨年は県から予算があった）して使用。生徒の日本語能力に応じた教材の精査。積み上げなど考慮し、中学での日本語指導の取り組みを参考に、高校での日本語指導も改善を図る。

③進路支援 進学指導・就職支援・キャリア教育

・日本人と同じ条件で、進路相談やキャリア教育を実施している。

【就職】◇外国人の多くの生徒が、卒業後も在学中の元の職場（派遣先等）に継続して勤めている生徒が多い。

【進学】◇京都外国語（短期）大学の指定校推薦制度：毎年1名枠。

2～3年に一度、外国人生徒が受験、進学。

・日本語ではなく英語やポルトガル語での留学生等試験で受験、合格した生徒もいる。

・ほとんどの外国人生徒の日本語読解力が高校3年レベルに達していないため、上記京都外国語大学以外の大学の入試を受験した生徒はいない。

・昨年度、ブラジルへ帰国し大学へ進学した生徒が1名いた。

④多文化共生に関わり教育や、心的サポート・生活相談

（カウンセラー、ソーシャルワーカー、養護教諭等も含む学校の対応）

◇学校全体で特別に多文化共生教育を実施しているわけではないが、当校には多国籍・異なる年齢（15～64歳：'20年度）、様々な生活や人生経験をした生徒がいるため、学校自体が多文化共生社会である。

◇昨年度より、『総合的な探究の時間』において「映像から学ぶ」講座で、異文化理解、文化の多様性について取り上げている。フィリピンの生徒が日本と母国についてポスターセッションのように発表したことがある。

◇英語教員や母語を話せるブラジル人県職員、JICA海外協力隊OBOGが、生徒のサポートだけでなく、母語による保護者との面談の手伝い、進学や学習の相談にのっている。

⑤地域の団体・大学・企業等との連携による取り組み

◇**高大連携事業**：京都外国語大学との連携（2005年～現在）日本語教育支援のため、大学生を毎年2名派遣していただいている。

◇**2020年度大阪大学イノベータープログラム**：昨年度半年間、大学院生1名を馬場分校の日本語教育支援のため、派遣していただいた。

◇**多文化共生支援センター（SHIPS）との連携**

・定住外国人の子どもの修学促進事業（滋賀県委託事業）：高校への新・編・転入学のための日本語教室「虹」の開講 ⇒ 生活のためだけでなく、全日制高校や馬場分校をはじめとする定時制高校を受験するための日本語教室を開講、34名が高校へ入学。（この教室は、2019年春で閉講）

・中南米や東南アジアの中学高校から馬場分校へ、転・編入学を希望する生徒の卒業証明書類の日本語訳の作成のサポートや進学相談を実施していただいた。

◇**滋賀県国際課との連携**：ブラジル人職員1名を日本語教育支援に派遣していただいている。

◇**滋賀県青年海外協力協会（青年海外協力隊滋賀県OBOG会）やJICA関西センターとの連携**：外国人生徒達の母語を話すことができ、出身国の生活や文化を理解しているJICA海外協力隊OBOGを日本語教育ボランティアとして派遣していただいている。昨年度は、JICA関西センターから、新型コロナウイルス感染予防のため一時帰国している隊員4名も派遣していただいた。